

特別インタビュー ～柴理事長に聞く～ 【第1回】

記者) 理事長就任15年目の節目を迎えるにあたり、これまで語られてこなかった理事長ご自身の歩みと、理念に至る背景をお聞かせください。

2025年11月27日 ドメ&ユウガ編集部



ごあいさつ

2012年に父の後継者として私が理事長に就任した際、前置きも説明もなく、突然現れた私は、何者かすら分からなかったと思います。「車屋さんの社長」と言われることに否定も説明もしませんでした。実績を示した時に自分の本当の姿をイントロダクションしようと考えていました。気がつけば14年という時間が経ってしまった訳です。しかし、学法の理念を知っていただくためには、まさに”今”しかないと思い、私自身の履歴的な事柄について、触れさせていただきたいと思います。

決意と覚悟

令和8年度は、理事長就任15年目となり、一つの節目を迎えます。前身である潮止幼稚園の新園舎の新築と解体工事が決定され、学校法人としての新たな第二章を迎えることになります。

その年を迎えるにあたり、理事長としての決意と覚悟についてお話ししたく、今回、取材形式での意向を表明しました。まずは、生い立ちから自身のターニングポイントについてお話しします。

先代の父親は、私が高校に入学した頃から、事業である学法幼稚園を継がせようと、勝手にルールを敷いていました。しかしわたしは父に対し、「人生の20代前半の”今”だからこそ、挑戦できることを実現させたい」と説得し、自分を試すために、世界に出る決意を固めました。

それまでは外国の事は新聞・雑誌やTVでしか知りませんでした。が、商社マンを志し、ドイツ、オランダ、イタリア、イギリスを片道切符で1ヶ月近く渡り歩き、たくさんの人々と出会いました。しかし、外国の人たちを理解するためにはとにかく英語力が必要だと痛感しました。帰国後、マンツーマンで英語講師との英語漬けの日々を過ごしました。「聞き取る、話せる」までの半年間を経て、20代半ばに再度ヨーロッパへチャレンジしました。その後帰国し、24歳で起業しました。

海外での経験

英会話が出来るようになると、ヨーロッパのいろいろな国に行きました。もちろん貿易のビジネスのためですが、その国の人々との会話は、自分の価値観さえも劇的に変えるものでした。

幼児期からのモンテッソーリ教育を受けた人たちは、独創的で活

発でした。英語を使った会話ではありますが、ヨーロッパの人たちの英語を話すレベルは母国語の次の第二言語であるにもかかわらず、当時の私とは比べものにならないほど優れていました。その時「なぜ日本人は中・高・大と10年も英語を学んできたのに、何一つ聞き取れず日常会話すらうまく話せないのか」、同時に「なぜ日本での英会話は効果が出にくいのか」と考えることが多くありました。

3～4ヶ月ヨーロッパに滞在すると、英語力・会話は飛躍的に伸びました。イギリスではスラングや方言などのイントネーションまで分かるほどに成長し、ヨーロッパの人々の文化、思想、習慣について話し合いました。日本語が皆無の世界では、英語を話さなければ生活がままなりません。必死で聞き、必死で話し、イントネーションを覚える。これが英語力には絶対条件だと理解し、どんどん吸収し、成長したのを覚えており、つらくとも楽しい思い出となりました。

試行錯誤の日々

学法理事長として継承する決断をしたのは、父親が他界する1ヶ月前でした。幼稚園経営について何も知らない状態での事業継承は、困難の連続で、幼児教育をいろいろ調べ、研修など何度も参加して学びました。

就任して落ち着いたら、自分が経験した世界観、語学をぜひ自分の幼稚園でも生かしたいと思い、自分の出身大学や国立大学の幼児教育専門の教授などと取り組みを模索しました。当時は、早年時の脳科学がもてはやされる時代であったこともあり、入職1年目から先走って英語学習や、地球儀を購入し世界地理などを教え

るカリキュラムを組もうと考えました。しかし、子ども達はその様なことに興味も関心もなく、遊ぶことに夢中で、指導する学習的ワーク、体操、ダンス、楽器でさえも、何となく楽しんでいない印象があったことや、単に英語教育を実践してもねらいが見えず、ましてや世界観を示すことも不可能だと、英語教育はすぐに中止しました。

指導し、詰め込むことは一種の苦痛を与えてしまいます。幼児期の子どもの中から忍耐を経験させてまで、教育という名のもとに大人の勝手な価値観を押し付けるべきなのか。「将来のためになるから我慢しなさい」と言うべきなのか。自分の中で葛藤が渦巻いていました。

“好き”を見つける

近隣の幼稚園では「園児を集めるため、いろいろな幼児教育を取り入れ、特色を出すことからやるしかない」と盛んに行っていましたが、私には違和感しかありませんでした。

では、なぜ人生で一番遊びたい時期に学習に縛られるのか。就学すればいやでも学習しなければならなくなる。いろいろな子どもに「何をしている時が楽しい？」と問い掛けると、やはり「遊んでいる時」「恐竜のことを考えている時」「泥だんごを固く光るくらいにできた時」「お母さんを手伝った時」「友達とかけっこで競った時」——そんな“遊び”の中に楽しさがありました。

遊びの中から友達とのコミュニケーションを見出し、遊びを工夫したりする。子どもが学ぶ場所は遊びの中にあると考えました。そして、子ども自身の主体的な行動の根底には「考えること」が好奇心を呼び、「自分で”好き”を見つける」ことにつながる。本来、法

人の理念となる「豊かな心と感性を育む」とは、まさにそのことだと腑に落ちました。

考える力を育てる

自分が経験した世界観も英語のスキルも、もとをたどれば、主体的な自己の考えと行動であり、親からの受動的なことではありませんでした。子ども達が将来を生きる上で、本当に豊かな人生を送る糧は、学習させることではなく、“主体的に自分で発見し、好奇心から興味・関心をもって、自分の未来を創りだすこと”だと結論に至りました。

教育者として、人生の経験から「将来必ず役に立つこと」ではなく、くじけずに挑戦する勇気と、その過程での試行錯誤の経験こそ大切ではないかと感じています。

何事にもくじけず、何度も立ち上がって挑戦する気持ちと、人の気持ちを分かる心を育てることが、乳幼児期の人間力となる「芽ばえ」ではないかと思います。

日々の中で、子どもたちが遊びでの経験や思いは必ず「自分をどうするのか」と自身に問い、その中で“考えることのデザイン”をすることが習慣となって、学習や語学に向かうはずです。

無理なく自然に、そのような環境を自分で考え、子どもが考える力を育むことができるように、遊びの中からいろいろなことを学び、経験し、工夫して取り組み、日々成長するための見守りと子どもを信じる事が、法人理念であることを確認し、これからの歩むべき道であると確信しました。